

中国人留学生 黄遠生
1885年～1915年

著作集と巻頭の遺影

黄遠生^{こうえんせい}、本名は黄為基^{い き}、字を黄遠庸^{えんよう}といい、遠生はペンネームである。清朝最後の科挙（1905年）に19歳で合格し進士となったが、官吏とはならず留学の道を選び、中央大学専門科法律学科に学んだ。

留学後、任官して間もなく辛亥革命（1911年）が起こったため辞官し、翌年『少年中国週刊』を発刊したのを手始めに、月刊誌や新聞社の特約記者として活躍した。彼は報道文のスタイルを作り上げたと言われ、中華民国三大記者の一人とされる。

大總統の袁世凱は、黄遠生の才能と影響力の大きさをゆえに側近に置こうとし、黄遠生自身も国家の力を利用して言論の自由を確立しようとしていた。しかし、黄遠生は次第に袁世凱への批判の度合いを強め、距離を置くようになる。そのため身辺に危険も迫るようになり、やがて首都南京から上海へ逃れ、さらに渡米する道を選択した。しかし、15年12月27日、彼はサンフランシスコの土を踏んだ直後に刺殺され、弱冠31歳でこの世を去る。皮肉なことに、黄遠生は袁世凱に近い人物と目され、それに反対する中華革命党(国民党)の刺客に暗殺されたという。